12．腰仙部脂肪髄膜瘤解離術後に脊髄空洞症の増大をきたした1例

徳永　誠，北原　宏，南　昌平
望月真人，品田良之　（千大）
新井貞男　（国立千葉東）

症例は10歳，女児，5年前に腰仙部脂肪髄膜瘤解離術を受けている。今回歩行障害と尿失禁を主訴に来院。MRI にて，腰仙部から第6胸椎レベルまでの脊髄空洞症を認め，空洞―クモ膜下腔シャント術を施行。術後空洞は縮小し，臨床症状にも改善がみられた。前回手術後に発生した癒着性クモ膜炎が，空洞増大に関与したと考えられる。

13．低位脊髄を伴った脊柱管狭窄の1例

鮫田寛明，高橋和久，山縣正庸
村上正純，望月真人，品田良之
高橋　弦，豊根知明　（千大）

成人発症した低位脊髄を伴った脊柱管狭窄の1例につき報告した。症例は38歳，女性で，主訴は間欠跛行および両側殿部痛である。膀胱直腸障害，下肢および殿部の知覚障害が認められた。画像的には低位脊髄，終糸の存在，L4―5椎間での黄色靱帯による後方よりの圧排，椎間関節の変形が認められた。手術にて狭窄部の除圧および終糸の切離，後側方固定術を施行し症状の改善を得た。本症例は先天性の低位脊髄が無症状に経過し，成人になってから先天的に発育不全のある脊柱後方要素に変性性変化が生じ，脊柱管狭窄を発症したものと考えられた。

14．腰椎すべり症に仙骨神経根嚢腫を伴った1例

大渕聡巳，高橋和久，山縣正庸
村上正純，望月真人，高橋　弦
大竹良治，豊根知明　（千大）

腰椎変性すべり症に脊髄造影，MRI にて両側S2，S3神経根の嚢腫様肥大を認めた1例を経験した。文献上神経根嚢腫に多く認められる下肢痛，腰仙痛などの症状は，本例においては腰椎すべり症によるものと考えられた。今後 MRI の普及とともにこのような疾患が発見されることが多くなっていくと思われるが，必ずしも嚢腫が症状を発現するとは限らず，手術適応には充分な検索と慎重な態度が必要である。

15．梨状筋部の特異な病態による坐骨神経障害の1例

後藤憲一郎，村上正純，秋田　徹
田中　泰弘，袖山知典，坂本雅昭
（千大）

症例は37歳，男性。主訴は，右下肢痛およびしびれ感。入院時，右股関節可動域は屈曲45度，内旋－5度と著明に制限されていた。神経学的には右側で SLR 40度陽性，Valleix 点に強い圧痛を認め，Ereiberg test 陽性であった。股関節単純レ線において，右大腿骨頭外側部に数個の遊離骨片と後下腸骨棘に指様異常骨を認めた。後者は，右後下腸骨棘と関節面を形成し，梨状筋部に存在していた。術中所見より，指様の異常骨は，梨状筋下縁の腱性部分の骨化とともに坐骨神経を静的，動的に圧迫していた。

16．神経根の腫大が認められた腰椎椎間板ヘルニアの1例
―神経根障害の機序に関する考察―

平山次郎，高橋　弦，豊根知明
村上正純，山縣正庸，高橋和久
（千大）

CTM，Gd-MRI にて神経根の腫大が認められ，術後3カ月目にその消失が確認された腰椎椎間板ヘルニアの1例を経験した。術後神経症状は正常化したにもかかわらず下肢痛は残存した。以上より本症例における根性痛は，神経根浮腫とともに圧迫による神経根炎から生じ，除圧により浮腫が消失した後も異所性放電などの機序により残存したと考えられた。

17．Fabella syndrome 様腓骨神経麻痺を呈した entrapment neuropathyの1例

宮崎達也，山縣正庸，村上正純
林　宗寛，永原　健　（千大）
西垣浩光　（千葉市立海浜）

肥厚した腓腹筋外側頭により Fabella syndrome 様腓骨神経麻痺をきたした1例を経験した。症例は61歳，女性。主訴は左下腿外側の疼痛としびれ感で，膝窩部外側の圧痛と膝関節伸展制限を認めた。深部反射，筋力，SLR テスト，およびX線，MRI 所見は正常であった。筋電図，神経ブロックの所見により，膝窩部での腓骨神経障害と診断し，手術を施行した。術中，肥厚した腓腹筋外側頭が神経を圧迫しており，除圧により症状は改善した。